

# 尾形先生の思い出

松 居 郁 子

尾形先生は、昭和60年4月に佛教大学英文学科へいらっしゃいました。多数の大学から請われる中、佛教大学へお迎えすることができたことは、とても喜ぶべきことだったと思います。

私は、尾形先生とは、3回生の講義で初めてお会いしました。体格が良くて、「デーン」と構えていらして、拝見するからに、「大学教授」という印象を受けました。また、「少しこわそうな先生かな？」という印象も受けましたが、これは、講義を受けていくうちに、全く反対の印象へと変わっていききました。とても偉大な先生でいらっしゃることには変わりありませんが、とても寛大な心をお持ちで、先生とお話させて頂くと、先生のゆったりとしたお気持ちがこちらまで届きました。そして、何だか肩の力がフッと抜けるようにさえ思われました。また、とても親しみを感じさせて下さる先生です。

尾形先生の講義を受け、私は、是非とも4回生では、尾形先生のゼミに入りたいと思うようになりました。そして、先生ご専門のアメリカ文学を選択し、卒業論文のテーマにはソーロウを選び、尾形先生のご指導を受けることができました。4回生のゼミでは、本当にお世話になりました。今この機会に、当時を思い出してみますと……

尾形先生のゼミは、受動的なものではなく、能動的なものでした。自分自身で研究し、ゼミの時間にその経過を発表し、先生の助言を頂くというものでした。4月の頃は、一体どのように進めていけばよいのか、何から手をつけていけばよいのか、とても悩んだものでした。そのような時、先生は、「下書きに使うノートは、僕はこんなのを使っているよ」、「ノートは1行おきに使っているよ」などと、助言を下さいました。そんなことぐらいでと思われるかもしれ

ませんが、私は、こうした助言がきっかけで、少しずつ研究を進めていくことができました。私は、まず、先生の使われているノートと同じものを手に入れました。ノートを開き、参考文献を開き、ペンを手にとり、先生のお顔を思い浮かべ、机の前に坐りました。すると、今まで全く動かなかったペンを持つ手が、ゆっくりとではありますが、ノートの上を滑っていくようになりました。思わず笑みがこぼれ、「尾形先生ありがとうございます」と、口ずさんでいました。

先生のご指導には、一つのお考えがあったようです。それは、「好きこそ物の上手なれ」です。いくら勉強の嫌いな学生のお尻をたたき、強制しても、決して効果のあるものではないとお考えだったようです。それで、4回生のゼミでも、決してテキストを決めることなく、各自のテーマに取り組むことができるようにして下さったのだと思います。自分で選んだテーマなので、強制されなくてもできるはずです。

尾形先生は、また、学問だけでなく、いろいろな方面に精通していらっしゃいます。車の運転、乗馬、ゴルフ、碁、将棋、カメラ等々、多くの趣味をお持ちです。研究室の机の引き出しには、いつもカメラを入れていらっしゃいます。何枚か撮って頂いたこともあります。「もっとリラックスして」と、まるでプロのカメラマンに撮って頂いているようでした。多くの趣味をお持ちのせいか、先生はとても若々しくいらっしゃいます。学内でお会いすると、いつも右手をあげて、気軽に「やあ！」と声をかけて下さいます。「京都大学名誉教授」という肩書きをお持ちの先生ですが、「名誉教授」から想像するには、あまりにも若々しく、輝いていらっしゃいます。

この度、定年退職されるとお聞きし、先生の思い出を頭に浮かぶままに書きました。尾形先生、本当にありがとうございました。これからは、先生のご指導を受けることができましたことを、私の誇りにしていきたいと思っております。

いつまでも若々しく、輝いていらして下さい。